



緊急インタビュー

Strategy for after COVID-19 アフターコロナに向けて

新型コロナウイルス感染症の影響により葬儀が変わってしまった。
会葬者を制限した近親者のみの家族葬がふえ
そして一日葬や直葬率が高まってしまった。
通夜振舞いや精進落としは自粛……。
本来の姿ではない、葬送儀礼を省略、
あるいは軽視した送り方でいいのだろうか。
なぜ人間は死者を弔うのか……。
葬祭事業者には葬儀の本質を、葬儀の意義を伝えていく責務がある。
しばらくは「withコロナ」が続くが、「Afterコロナ」に向け、
いま、葬祭事業者は何をすべきなのか？

葬祭事業者のオピニオンリーダーに聞くシリーズ企画第一弾として、
清月記 菅原裕典社長に
「withコロナ」「Afterコロナ」に向けた戦略をうかがった。

(株)清月記 代表取締役

菅原裕典 氏

東日本大震災時に酷似
有事に率先して動くことが肝要

— 新型コロナウイルスの影響はいかがですか。
菅原 葬儀はバブルが崩壊しても、阪神・淡路大震災が起きても、リーマンショックがあってもなくなるものではありません。しかし、そういう状況になると、それまでの価格帯と比べて1~2ランク下がってしまうのは事実です。

そして2011年3月、私たちは東日本大震災を経験しました。そのときは2通りの葬儀があ

りました。それは、被災された方の葬儀と病気で亡くなりになられた方の葬儀。被災者の葬儀は当然ながら質素にならざるを得なかったのですが、病気で亡くなりの方で大きな被災をされていない方でも、まわりの状況に合わせて質素な葬儀になりました。その後復興していくなかで、病気で亡くなりの方の葬儀は徐々に元に戻っていきましたが、それでもお盆前後までは質素な葬儀が多数を占めました。また、お身内がまだ行方不明であったり、避難所生活を余儀なくされている方の葬儀が元に戻るには1

年以上もかかりました。

今回の新型コロナウイルスですが、宮城県は首都圏や大阪、北海道に比べて感染者数は少なく、感染されてお亡くなりになられた方は1人という状況です（5月末現在）。しかしながら、葬儀は縮小してしまいました。つまり、東日本大震災後の状況と若干似ているところがあるようです。感染してお亡くなりになられたわけではないし、感染者もそれほどいない状況なのに、他県の状況に合わせて質素になった。また、ご遺族の心配として「うちの葬儀で感染が広まってしまっては申し訳ない」と自粛ムードも高まったようです。

— 宮城県は感染者は少ないですが、対策はされたのですか。

菅原 3月下旬から4月初旬にかけて、宮城県、仙台市、そして保健所、病院と協議をいたしました。当時は県内の感染者はまだ1桁の段階でしたので、弊社からの打合せ要望に対してはいずれも「まだ早い」というような雰囲気でしたが、指針を明確にしておかないと対応が後手になってしまうとの思いでした。その結果、感染者に対しては病院側で納体袋に入れること、その後、棺には葬祭事業者が入れる、そして霊安室や病室に余裕があれば出棺まで病院で安置していただくなど、さまざまなことを取り決めました。後日、県から納体袋など30セットの要請があり、すぐに納めさせていただきました。

私が代表理事を務めている仙台地域葬儀会館連絡協議会という一般社団法人と、当時副理事長をしておりました宮城県葬祭業協同組合とも連携し、準備を進めました。東日本大震災のときと同様に、県、市、保健所、病院、そしてわれわれ葬祭事業者が連携を図りましたので、対応が後手になることはありません。

また、県内の事業者アンケートをとったところ、「コロナに感染された方の葬儀は扱えない」とする事業者が多かった。その理由としてはスタッフが感染したら日常業務に支障をきたす、会館に安置しなくても「あそこで安置をしたらいい」「あの葬儀社は感染遺体を扱ったらいい」という風評被害が怖いと。そこで当社では岩手県県境から福島県県境まで、県内全域で対応することを決めました。

震災のときも県や市、病院などとの協議をしましたが、有事の際に率先して受け入れる姿勢を内外に示すことが重要です。

そうしているうちに、宮城県の北西部でコロナで亡くなりの方が出てしまいました。その対応については近辺の葬儀社が担当されたのですが、どのように対応されるのかを拝見させていただくため、当社から担当者を派遣いたしました。会社としてコロナで亡くなりの方を責任をもって対応することを明確にするとともに、誰が担当するのかということも決めました。担当を決めることで社内への意思表示にもなり、士気を高めていくことができました。

どんな状況であっても
葬儀の質の高さを追求

— そうしたなかで、清月記流の質の高い葬儀はどのように提案されたのですか。

菅原 参列者は5~10人前後という規模がほとんどです。ご遺族もこういう状況ですから、知人には声をかけづらいのですが、大切な方をしっかりと送りたいという想いは強い。知人のほうも「参列したい、お線香をあげたい」という方は多い。誰もこういう状況だから葬儀をするべきではない、知人の葬儀に行きたくないと思っている人はいないのです。

当社のコンセプトの1つに「後悔をさせない」というのがございます。会葬者をどこまで呼ばれるのか、祭壇や棺をどうされるかは、ご遺族の意向を踏まえませんが、スタッフには単価が下がることをコロナのせいにしてほしくない。規模は小さいながら、なかには100万円の祭壇を飾る方もいらっしゃる。こちら側が最初から質素にするものだと決めつけていたら、後悔をさせてしまうことになる。どんな状況であれ、われわれは最善の提案をしなければなりません。失礼なことをしてはいけません。それは自分で自分の首を絞めることになってしまいます。

よく目配り、気配り、心配りといいますが、私は4つ目として「手配り」ができなければダメだと思います。手配りはすなわち行動です。相手のことを思った行動ができなければなりません。それはご提案についてもいえることです。

— 参列できない方のために、葬儀のWeb配信